

効率農業の実践経営学

農業に対するイメージはどこから生まれるのでしょうか？

農業経営学を研究していると、そのような先入観が間違っていることが大変多いことに驚かされます。

実践の学としての農業経営学

山あいの棚田は、農作業効率がよくありません。消費地からも離れています。それを何とか支援したい。しかし、農学は、農業者と仲良くなるのが目的の学問ではありません。また、税金を要求するための御用学問でもありません。農業経営学では、農業者に信頼されてようやく半人前、いかにすれば農業や農村が持続性を保てるのか、経営が目的に向かって活動できるのか、それを実験室の中ではなく、現実社会に即して明らかにしていきます。

条件不利地域における農業経営の持続性

これまでの研究結果から、山あいの田んぼでも、現在の平均値の20倍の規模の水田経営が成立することが、計算上は明らかになりました。ところが、実際に探してみると、そのような経営は多くはありません。なぜでしょうか？ その原因の一つは、世代間の利益の分配の仕方にあります。広く薄く、村ぐるみで農業所得を分け合っている、若者が所得を得られないのです。島根県の山あいの村では、30代の若者3名に田んぼの作業を任せることで、彼らに所得機会を提供しています。高齢者は、若者の仕事ぶりに不満もあるのですが、手間のかかる草刈りなどを手伝います。



分析結果の地域へのフィードバック

研究結果のフィードバックは、学問が世に貢献するための最大の方法であり、今後の研究展開にも不可欠です。

とはいえ、わずかな農業者で農地が守れるのですから、人々が農村に定住できなくなっています。農業経営の多角化、高付加価値化の方策がその次に来る課題です。狭小な日本の田んぼや畑でも、ITを用いて圃場別の生産管理を行うことにより、より品質の高い生産物をブランド化できる可能性も見えてきます。



テレビ会議による農村起業の経営者へのヒアリング

農産物加工や農業体験を行っている経営者から実践について学びます。ITの普及は、学問の間口も広がります。

GIS (地理情報システム) による農地保全可能範囲の結果表示

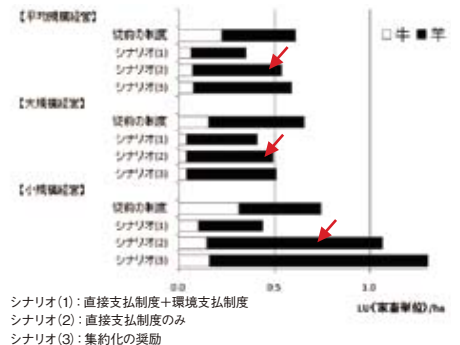


教えて! Q&A

条件不利地域

ヨーロッパでは1970年代から、生産性が低い地域(条件不利地域)の農業経営に補助金が支払われてきました。日本でも2000年より、中山間地域の農業経営への補助が行われています。その背景には、農村地域が培ってきた景観や文化、生産のための資源を守り、農村への定住を促し、都市と農村との所得格差を是正しようという考え方があります。

イギリスの条件不利地域における家畜飼養の将来予測



農業経営のIT利用

人工衛星からの電波を利用した位置情報の把握技術(一般に「GPS技術」と呼ばれます)を利用して、現在位置や運行軌跡を把握し、自動運転を行い、圃場ごとの収穫量の記録や施肥量の制御を行います。近年、こうした技術が実用段階となり、普及が進んでいます。そして、実際の農業経営に役立てるための試行錯誤が行われています。



農作業におけるGPS機器の利用



GPSによる作業軌跡の記録

地域農業をマネジメントする

農業への想いを、未来への可能性として示す

農業・資源経済学専攻 農業経営学研究室 八木洋憲准教授

